良渚文化の冠状玉器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/2871

良渚文化の冠状玉器

渡辺　朋恵

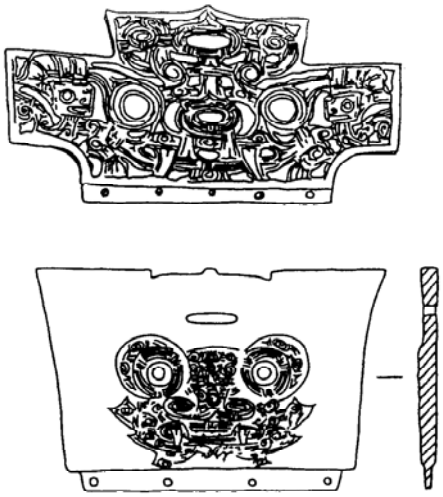
良渚文化と呼ばれる長江下流域に分布する文化は、今から約5300年前～約4000年前に浙江省余杭市の瑶山、反山遺跡等を含む良渚遺跡群を中心として、浙江省北部、江蘇省南部に展開した中国古代文明の重要な源流の１つである。この良渚文化の中で、最もその特色を備えている器物は玉器であり、質、技術、美しさには目を見張るものがある。本稿で取り上げるのは、この良渚文化に見られる冠状玉器という器物である。

この器物は基本的に良渚文化の墓葬から発見され、良渚文化の中心である反山、瑶山の両遺跡ではほぼ全ての墓葬から冠状玉器が出土しているため、当時非常に位の高い人物が所有していたものであることがわかる。

この冠状玉器は、櫛に固定し、人の頭の結われた髪に挿す形で使用されていたことが明らかで、装飾品の中でも最も目立つものであったと考えられる。よって冠状玉器の形状や紋様は、それらを所有する人々にとって非常に重要であったに違いない。このように自分自身の高貴さや権力を示す性格をも兼ね備えた装飾品である冠状玉器が、どのような形から始まり、どのように形を変えていったのか、と言う興味に基づき本稿のテーマは設定された。また、冠状玉器は基本的に墓葬から出土するため、冠状玉器の編年は、冠状玉器が副葬されている墓葬が良渚文化期のいつごろに造られたかという疑問を解決する手掛りともなるのである。よって、反山、瑶山遺跡の墓葬の成立順序についても考察を進めてゆく。

編年は、良渚文化を土器の型式から計5期に分期し、同じ墓葬内から出土した土器の型式や玉琮を主とする玉器類に刻まれた紋様から時期的位置付けを行い、順に並べてゆくという方法をとる。行った結果、冠状玉器の形状は時期ごとに決まった形状を呈する事が明らかとなり、墓葬の時期的位置付けを行うのに有効な材料であるため、この編年を利用して反山、瑶山の両遺跡の墓葬成立順序という問題に対して、新たな考えを提出することができた。

さらに、冠状玉器の形状を良渚文化の象徴である神人獣面紋に重ね合わせる型式の起こり、またその意識の衰退という現象が見られ、5000年前の良渚文化の人々の精神的文化の一端をも感じ取ることができ、非常に興味深い結果となった。



反山遺跡出土の冠状玉器